海外だより

ヨーロッパかけある記

横浜市立大学教授　小山路男

このたび機会にめぐまれて，かねてから行ってみたいと思っていたヨーロッパに出かけることができた。生れて始めての外国旅行，しかも1人ぼっちというのだから，心細いことおびただしい。おまけにできるだけ何でもみてやろうというわけで，日程もまわる土地も欲張ったものだから，目のまわる忙しさであった。すっかり疲れ果てて，ロンドンからBOAC に乗ったときは，正直いってホッとした。そのくせ，まだ疲れも取れないうちから，また来年も行きたいと考えているのだから，ヨーロッパとは不思議な魅力をもつところだと思う。

まわった都市の名を順にあげると，ストックホルム，コペンハーゲン，ベルリン，ボン，フランクフルト，ローマ，ジュネーブ，パリ，ロンドンの9市7か国である。35日間で1か所平均4日というのだから，ほんの少しばかり各国をのぞいてみた程度のことにすぎない。しかも，4日のうち1日は移動でつぶれ，1日はアポイントメントのことで大使館と連絡し，1日は官庁その他を訪ねるというわけで，観光どころのさわぎではなかった。とくに辛かったのは移動で，43kgのやせ男が20kgの荷物にふりまわされた。それも航空便が正確に出てくれればよいのだが，フランクフルト，ローマ間のごときは，9時出発のルフト・ハンザが霧のため欠航になって，アリタリアに乗り換えたのが午後2時をすぎるありさまだった。あのときの心細さは，忘れられない。このようなわけで，調査と観光は絶対に両立しないと身にしみてわかった。

つぎの問題は言葉である。ホテルやレストランでは英語が通じるが，ローマやパリの市中はほとんどダメである。この点，北欧は楽で，英語とドイツ語で何とかやれた。西ドイツは私のブロークンなドイツ語でも専門家とは充分話が通じたし，わからなければノートに書いてみせるという手をつかった。とくにベルリンの一般疾病金庫（AOK）や，フランクフルトにあるヘッセンの連合基金ではそうであった。ボンのときは，ツイペレルさんという年金の専門家と1時間半ほど話あったほかは，幸いにも日独技術交換で来ておられたご一行と一緒になることができた。社会保険庁の坂井船保課長や労働省の佐藤失保課長には，大変お世話になった。このときは通訳もついていたので，まったく楽であった。

言葉で一番困ったのは，レストランのメニ

ューである。トリ肉とピースの料理と書いてあったから頼んでみると，あまく煮込んだピースがゴッテリ出されてトリ肉はわずかしか入っていない。何とか食べてはみたものの，ムネヤケがして困った。とくにパリではメニューが全部手書きで読みにくい。その上に私のフランス語というのはひどいもので，肉か魚の区別がやっとである。値だんと相談して注文したら，大きな肉片が二きれと野菜とが煮てある。ボリユームがありすぎて，すっかり参った。しかもデザートはチーズとパンというのだから，少食の私にはとてもつきあえない。向うの連中は平均体重80kg，私はその約半分なのだから無理はない。しかも連中は仲間とシャベリながら1時間以上も楽しんでいるが，1人旅のわびしさは話し相手がいない。そこへ予想もしなかった大量の料理が出されるのだから，ガンバレと気あいをかけて，ワインをチビチビやりながら悪戦苦闘することになる。まったくもって，これではヨーロッパ珍道中であった。

飲食物の失敗談を始めるとキリがないが，恐らくは誰でも最初は同じだろうと思う。それにしても，旅行期間中に和食を食べたいと思ったことは1度もなかった。その土地のものがもっともうまいし，値段も安い。たどたどしくともその土地の言葉を使い，その土地のものを食うことである。1人旅の気安さは失敗を苦にしなくともよいし，また誰の迷惑にもならない。やかましい電話もかからなければ，原稿の促催とか会合の心配もない。自分の責任で行動することとは，こんなにも自由をあたえるものか。自由と責任という言葉の重さと，自由の貴重さを痛感したのが最大の収穫であった。

帰って来ると，どこの国がよかったか，とよくたずねられる。だが，こういう質問にはどう答えてよいのか，わからない。たとえばストックホルムに4泊しても，スウェーデンが理解できるはずはない。西ドイツは比較的に長かったのだが，これとても同様である。ちょっとした自分の体験から全体の印象を語るのは，まったくもって危険である。とくに社会保険の運営や実態については，その国に相当長期間滞在してみないと判断はできなかろう。そういう危険をあえて犯して，私の感想を書いてみよう。

北欧の福祉国家では税金がひどく高いが，あのような国家像を日本にあてはめようとしても無理だと思った。人口が少なく，国民所得が高い上に平均化している。小さなコミュニティが集まって国家を形成しているのだから，市民が相互扶助とか社会連帯でお互いの生活を保障しあう基盤ができている。あの国の人びとにとっては，福祉国家は現実そのものである。日本の福祉国家論はどうも観念論に走りすぎて，現実の基盤をややもすれば軽くみているのではないかと思う。それにしても，アルコール中毒と麻薬がいまやあの国々でのなやみの種となっている。この問題は個人の自覚をまつ以外に方法はない，とぶ然とした顔をして説明してくれた人の顔を思い出す。福祉国家になったら，問題が片づくのではない。むしろ国家と個人，自由と規律の問題をより一層深刻に考えなければならないだろう。

西ドイツは変な国である。社会保険制度そのものはきわめてすぐれてはいるものの，各ラントはそれぞれ相対的に独立性をもってい

るらしい。だから，ベルリンでは，ヘッセンではという話はできるが，西ドイツ全体の運営状況はこうだったというのは危険である。連邦共和国という言葉の意味は，あの根強い地方分権思想を抜きにしては理解できまい。さらにまた，各疾病金庫が自己管理を強調している姿勢は，日本の小集団方式論よりもはるかに根強い伝統と実績を踏まえているからなのだろう。色々な意味で，西ドイツは非常に興味深かった。

ローマとパリで痛感したのは，わが国の海外社会保障研究の水準の高さである。妙なことを書くようだが，事実なのだから仕方がない。抜本改正の答申の取りまとめのため，私は充分な予備的研究をして出発する時間がなかった。そのため，社会保障年鑑その他の文献を読みながら各地をまわったのであるが，ローマでもパリでも私のにわか勉強の質問に驚いていた。それだけよく知っているのなら，何も聞きに来なくともよいではないか。事実，そう言われたものである。そこで先方の係の人も，もう一歩突込んだ話をしてくれた。それは文献上の知識を深めると同時に，あの国の連中がいまもっともなやんでいること，自営業者への適用拡大とか医療費の増大について素直な意見を聞くことができた。なお，専門用語だけは原語をリスト・アップしておいて，通訳の人の手を借りなかったことが，時間と労力の大きな節約になった。

そうして最後にロンドンである。4泊して3日間はアポイントメントに従って見学したり面会したりしたので，大英博物館とロンドン塔をみた程度に終ったが，収穫は一番大きかった。大使館の平賀書記官とＬＳＥに留学している厚生省の堀さんのお世話になったのだが，随分とご迷惑をかけた。私はイギリスはやや専門的に研究したこともあるので，とくに興味深かったのであるが，やはり机上の研究ではダメだなと痛感した。たとえば，大ロンドン市の中にウェストミンスター市がある。そうして，地域福祉の主体は後者なのである。地方自治の伝統がとくに強固であることは知ってはいたが，実際の見聞はそれ以上であった。それに救貧法史や労働運動史に出てくる地名が，市内のいたるところにあって私をよろこばせてくれた。百聞は一見にしかず，である。そうして，私の感想は伝統と基盤のあるところは，それなりに立派だということであった。ヘルス・サービスが完全とはいえないまでも，イギリスは悠々としかも着実に自己の道を歩いている。当面する諸問題もさることながら，あの落ち着きはらった自信の強さは感心してしまった。

旅行中，私の身体には次第に疲労が累積されて行った。フランクフルトでは歯が痛み，用意した薬でやっと治った。だが，ローマではまた疲れて，クタクタになってジュネーブに着いた。あの時，空港に厚生省の渡辺さんとＩＬＯの樋口さんのお２人が迎えに来てくれていて，地獄で仏にあったような気がした。ご両氏のご厚意でＩＬＯやＷＨＯを見学したり，うまいごちそうにありついたり，本当に有難かった。ジュネーブで元気を回復したからこそ，寒いパリでもロンドンでも，何とか仕事ができたと思う。それにしても，厚生省関係のアタッシェがもう少し各地にいてくれたら，と思う。少くとも北欧１カ所とパリあたりにいてくれたら，どんなに楽だったろう。妙なもので，身内意識がつい働くもの

らしい。

35日間，ヨーロッパをかけ歩いて，さぞへばったろうと帰国後体重を測ったら2kgふえていた。まったくうれしい驚きである。苦しかったが楽しかった。出かけた以上，専門の研究者として恥かしいような仕事はできない。今度は観光ではなく調査なのだ，と何度も自分に言い聞かせながら，見知らぬ街をうろつきまわった。それもまだ1月もたっていない。まるで夢のようである。

社会保障こぼれ話

所得比例方式の給付

今日，多くの国々で，社会保障の必要なことについて，疑問を抱く者はほとんどいないであろう。しかし，社会保障がある最低水準だけをカバーすべきか，または，各個人の特定なニードをカバーする必要があり，またそれを望ましとし，しかもそれを可能とすべきかどうかについて，議論は2つに分れている。

前者は最低保障原則で，後者は補償原則で，前者の社会的給付では，社会構成員の保護が社会の義務であるとして，ある想定されたニードに対する給付だけが支給され，後者では，社会的給付を労働期間中における労働への報酬であるとして，人びとの果した労働に対する給付が支給される。これら2つの立場による社会的給付のうち，一般に，前者は社会保障の給付を最低水準の保障に限定して，ニードのテストを経て給付を支給し，後者は給付の評価がより広い保障のニードをもカバーしており，ニードのテストを不必要としている。もとより，最低水準の保証に反対する者はいないが，過去の環境に応じて最低水準を満足させるべきだ，という考え方に反対する者もほとんどいない。

いわゆる社会保障は最低水準を超える保障を意図しており，またそのような機能を託されている。この機能をもつ社会保障は，各人の一生の間における所得を移転する所得補償，社会の各構成員間で事故に応じて所得を移転する事故補償，および社会構成員の間で社会的公正により所得を移転する所得再分配の3つの役割が，色いろに組合されている。

これらの役割には，単なる最低水準だけよりもより高く，かつより広くカバーする所得比例方式の給付が，より効果的であるとされている。元来生計は資産と労働能力に依存しており，大部分の人びとは後者の報酬で生計を支えている。そのような状況では，所得に比例しない，社会的給付は，その機能の一部分を達成するにすぎない。また，本来，賃金は肉体的な生存だけでなく，社会的生活をも保証しなければならないが，社会保障も同様で，給付は，喪失した賃金を代替すべきで，しかも，給付は少なくとも賃金に比例させるべきである。なお，各種の事情から，賃金はそれぞれ異なっており，社会的な公正と公平の維持には，給付にも異なる賃金をある程度反映させることになる。さらに，社会保障制度は世帯単位で考えられており，所得に比例させなければ，社会保障は世帯の生計保障を達成する機能が十分に発揮できない。これらの事情から，社会保障の給付に所得比例方式を強調する意見がみうけられる。

（平石長久　社会保障研究所）